

Voice of Handball Vol.144

久保 弘毅

PROFILE 1971年生まれ。アナウンサー時代にハンドボール中継に携わり、8年連続でプレーオフ男子決勝を実況。その後フリーのスポーツライターとなり、ハンドボールやアマチュア野球などの取材を続けている。



ライフスキル

～戦場を、そして人生を生き抜く知恵～

昨年12月の世界女子選手権で、結果とともに内容でも成長のあとを見せた日本女子代表・おりひめジャパン。大会に入るまで、けっしていい状態とは言えなかった日本女子が結果を残せた背景には、なにがあったのだろうか。

おりひめの健闘

日本女子代表・おりひめジャパンが、昨年12月の第23回世界女子選手権（ドイツ）でがんばった。強豪ひしめく1次リーグを3位で勝ち抜き、決勝トーナメント1回戦では今大会3位のオランダ相手に延長戦の末、惜しくも敗れている。

24ヵ国中16位という数字以上に、内容がいい。初戦にブラジルに引き分けたあと、デンマークに大敗を喫したが、そこから立て直してモンテネグロから逆転で白星をあげた。研究され尽くされたデンマーク戦のあとだけに、この1勝は大きい。その後ロシアやオランダと接戦を繰り広げるなど、熊本で開催される2年

後の世界選手権につながる戦いができた。

8月の時点では、チームはバラバラだった。大会直前の遠征でも連敗続きで、選手たちも自信を失いかけていた。それでも大会に入ると一体感が高まり、いいパフォーマンスを続けて発揮した。単発で「いい試合」なら、これまでもあった。持続力があつたのが、今回のチームのいいところ。世界に精通しているウルリク・キルケリー監督の手腕が証明された大会と言っていだろうか。

やったことがなくても、やる

モンテネグロ戦は、前半終わって12―15。食らいついてはいたが、はっきり言って勝てる要素が見当たらない試合だった。

ところが後半に追いつき、残り1分少々からの7人攻撃で、横嶋彰（北國銀行）のカットインが決まって勝ち越し。最後は池原綾香（ニューヨーク・デンマーク）のパスカットでモンテネグロの攻撃をしのぎ、29―28で勝利した。

この時は、試合途中での修正、対

応がよかったと、櫛田亮介コーチ（三重バイオレットアイリス監督）は言う。「前半はオープンDFにして、サイドに打たせる『サイド勝負』にしました。この日に限らず、ウルリクは原則『サイド勝負』でチームDFを作ってきました。

ところが、前半であまりにもサイドでやられすぎました。データでも明らかでした。それを見てウルリクは『真ん中に相手を集めて、ディスタンスを打たせろ』と、『真ん中勝負』を指示しました。これまでの練習ではやっていないことでしたけど、選手はよく対応してくれました」

日本人は「練習でやってきたことで勝負したい」と言いがちな。それが「自分たちのハンドボール」であり、ポリシーとともに散るのが日本人的な「潔さ」でもある。

過去に男子の日本代表でも、イヴィツァ・リマニッチ監督（2006―07年）が試合中にどんな思いつきで指示を出し、選手たちが「練習でやっていないことばかり要求する」と反発した時期があった。リマニッチ監督は普段から気まぐれかつ

ヒステリックで、そういう部分が説得力を欠いたのかもしれない。ただ、その一方で「リマニッチが試合の中で言っていることはだいたいの中ずる」と感じるベテラン選手もいた。キルケリー監督の場合は、櫛田コーチが間に入ってクッションになったことが幸いした。櫛田コーチは続ける。

「ウルリクはヨーロッパの監督、選手の特徴やパーソナリティーまで熟知しています。そのウルリクが『この作戦でいこう』と言うのなら、そこに乗った方が得策でしょう。



左から田口強化本部長、キルケリー監督、櫛田コーチ

選手には『ウルリクがどういう指示を出しても対応できるよう、準備しておこう』と、前から伝えていました」

これまでとは違う指示を受けた選手側の心境はどうだったのか。攻守に活躍した角南唯（北國銀行）は、こう言っている。

「やったことがないというよりも、勝ちたい気持ちが強かったから、素直に受け入れられました」

かくして後半戦の日本の反撃が始まった。モンテネグロの攻撃を真ん中に集め、6：0DFで接触した状態でのディスタンスシュートを打てる作戦が功を奏した。

モンテネグロにも、前日の日本対デンマーク戦のイメージがあつたのかもしれない。デンマークがポストパスで日本を翻弄（ほんろう）したイメージがあつたから、モンテネグロのバックプレーヤーの間合いは近くなり、「ポストパスありき」でくるから、打ち抜く怖さがなかった。世界的な右バック・プラトビッチも後半は精彩を欠き、途中でベンチに下げられている。

榎田コーチは、三重で監督をしている時にも、コーチャビリティ（コーチングを受ける能力）の重要性を説いている。コーチングを受ける側に受け取る力がなければ、監督がよいアイデアを閃いても形にならない。キルケリー監督の采配もよかったが、受け手の成熟があったから、モンテネグロ戦の勝利はあったのだろう。昨年11月から急ぎよ代表コーチと呼ばれ、短期間でその下地を作った榎田コーチの存在もいい隠し味になった。

戦場での判断

同じような出来事が、日本選手権



筑波大男子・藤本監督(左)とネメシュコーチ

で仕掛けていこうと、4年生で意見が一致しました。練習でやってない、ではなく、点差を詰めるために必要かを判断して、最善のものを選びました」
4年生の意見を受け入れた藤本監督も寛容だ。

でもあった。男子の筑波大は3回戦で豊田合成と対戦し、前半だけで12-21と大量失点してしまった。ハーフタイムでは4年生を中心に話し合い、「3:3 D Fをやりたい」と、藤本元監督に伝えたという。
この3:3 D F、筑波大はシーズン中に一度もやっていない。6:0 D Fと3:2:1 D Fの2つだけでチームを作ってきたのに、最後の最後で、今までやっていないシステムを選手が選んだ。

日本代表でも活躍する4年生の徳田新之介は「3:2:1 D Fではボストの橋本明雄さんを守れないし、後半に追いつけるために3:3 D F

「やったことがないとやってもらえない」とも、利き手側を守るといった基本は6:0 D Fで落とし込んでいます。それに4年生は対人の感覚、駆け引きをわかっているから、彼らの判断を尊重しました」

このあたりは、いっしょに指導してきたハンガリー人で、かつて男子の代表コーチも務めたネメシュ・ローランドコーチの影響だと、藤本監督は言う。

「ローランドは『潔さだけだと、殺されちゃうよ』という、西欧人特有の感覚を持っています。自分たちの形だけにこだわる自己満足ではなく、相手とどう戦うかを捉えて、自分たちが生き延びるためのチーム作りを、この1年は彼を中心にやってきました」

教科書どおりの美しさはあるが、それだけではもろいし、ましてや戦場では生き残れない。藤本監督はベ



国際大会に強い筑波大・徳田(新)は、若くして戦場での戦い方を心得ている

ルト・パウワー監督時代(05-08年)の女子代表コーチを務めていた時に、世界選手権について興味深い発言を残している。

「世界選手権って、人間性を問われる場面の連続なんですよ。ルーズボールに飛び込むのは当たり前。それよりもっと分厚い、人間の根幹を問われているような、そんな激しさをワンプレーごとに感じるんです」

07年の世界選手権を終えての感想である。当時の日本女子は、世界ではまだ「お客さん」扱いだった。そこから10年。日本の女子も藤本監督も、その重厚なものの正体をつかみつつある。やってきたことを貫く美



世界選手権で大活躍だった池原(右)。一時帰国で、古巣の高木(三重)と感動の再会

学ではなく、戦場を生き抜くための知恵。そして相手を見ての駆け引き、やり取り。

「習ったことがないから、できません」は、小学校の授業でしか通用しない言い訳だ。今、この場では、やってきたことと違うことが起きている。そこに対応できる選手や指導者が、日本のハンドボール界にも増えてきたのかもしれない。

ライフスキル

話を日本女子代表に戻すと、今回の世界選手権でのキルケリー監督の判断はよかった。ただし、ここで誤解してほしくないことが1つある。キルケリー監督のひらめきを信じる

ことと、「キルケリー監督についていけば勝てる」と盲信することは似て異なる。

女子の選手はよく「この人(監督)についていけば、絶対勝てる」と口にする。高校、大学だけでなく、実業団でもよく聞かれるフレーズだ。自分たちのことをしっかり見てくれる指導者を、彼女たちはよくわかってはいる。だが、統率力のある名将の存在は、時として「支配と服従」の関係を作り、選手の自立を遅らせてしまう。盲信は思考停止につながり、自分自身がどうありたいかを思い描けない選手を生み出してしまふ。

田口隆強化本部長は、キルケリー監督を抜擢した理由の1つに、ライフスキルの重要性をあげていた。ライフスキルとは——厳密に言う就多岐にわたるが、田口強化本部長は「だれかについていくのではなく、自分がどうありたいか

を自分自身で設計できる選手を作ること。これが今までの日本の女子に足りなかったし、日本の指導スタイルも変わらなきゃいけない」と説明していた。

キルケリー監督自身は「女性の自立」や「ライフスキル」といった言葉を用いることはいつさいない。だが、彼のめざすハンドボールは、その場の状況を判断して最善のものを選択できる選手を求めている。そういう選手が増えれば、世界と互角に戦えることも、今回の世界選手権で証明した。

いい例が池原綾香だろう。17-18シーズンからデンマークでプレーし、日本人では初めてヨーロッパチャンピオンズリーグに出場した右サイドは、世界選手権でシュート率8割超えの大活躍だった。

世界を相手に8割決めたこと以上に、シュートを外したあとの態度がよかったと評判だった。一時帰国した池原に聞くと、そのあたりの立ち振る舞いは海外に行ってから変えたという。

「日本人はシュートを外すと『ごめ

んなさい』って落ち込むけど、向こうの人はまったく気にしていません。『外したって、次決めればいいじゃん』って感じですよ。私もそれを見て勉強になったし、今回の世界選手権ではシュートを外しても、私は謝っていません」

こういった気持ちの切り替えも、1つのライフスキル。失敗をして謝るのは、誠意のようで誠意ではない。失敗を引きずらずに、次に決めることが、本当の誠意。続けて失敗するようでは、戦場で生き残れない。海外の大きなGKに慣れただけでなく、戦いの流儀を見て学べたことが、日本にいた時の池原に足りなかった勝負強さを生み出したのだらう。

これまで言われてきた「精神力」や、お偉いさんが好んで使う「人間力」も、突き詰めると同じかもしれない。でも、世界の舞台で求められるものとは少し異なる。戦いの場で問われる「重厚な厚み」の正体はライフスキル。技術だから、後天的に身につけることは可能だし、そこに気づいたチームや選手が、国内でも結果を残しつつある。